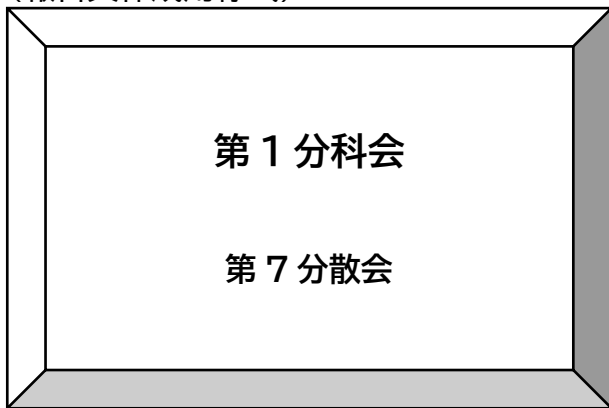




I はじめに

基調提案より

今から十数年前、はじめて全人教大会に参加し始めたころ、熱い思いで実践に取り組まれている方が、全国にこんなにもたくさんいるのだと感動し、涙したにもかかわらず、自分事としてつなげて考えていなかったことを実感しました。

子どもを取り巻く差別の現実、見えていないものがたくさんあります。一つの事実の背景に何があるのか、それを見よう、わかろうとしないと見えてこないと思います。

自分自身が一人ひとりの生徒を「わかりたい」という思いで関わっていく中で、私自身が生徒と少しずつつながりを感じてうれしくなることや、生徒同士が互いを認め合う瞬間や相手の思いを「わかろう」とする瞬間があって、胸が熱くなることが何度もありました。

人権・同和教育との出会いは、自分自身の無知と内なる差別性と向き合うことを求めます。そしてそんな自分が、自分自身や周囲の人々とつながることができるということが、いかに社会関係資本として大切なことか、差別を解消していく原点となるかということを教えてください。

「差別をなくす」言葉でいうのは簡単ですが、一朝一夕にかなえることができるものではありません。差別の現実から学び、自分の中にある差別と向き合い、小さな一つ一つのことを重ね続けていくことで、子どもと子どもがつながっていく、子ども自身が自分を認めていける、そんな教育をつくっていくことをめざさなければなりません。

「差別の現実から学ぶ」実践こそ、将来につなぎ、大きな変革を生み出す教育であると考えます。

5本の実践報告から、討議課題に沿って人権確立への道筋となる教育内容を明らかにしていきたいと考えています。

- ① 子どもたちの生活の中の辛さや困難さを「自分の課題」ととらえ、差別をなくすための教育内容の創造にどう取り組んでいるか
- ② 「集団づくり・仲間づくり」をどのように行い、子どもと子どもをどうつなぎ、どのような変

容が見られたか

- ③ 実践を通し、教育者が何を学び、どう変容していったか、それが子どもたちの変容にどうつながったか
- ④ 学校だけでなく、家庭・地域・関係機関と連携し、どのように子どもたちの「育ち」を支えていったか

などについて、参加者の一人ひとりが気になる子のことを思い浮かべながら、その子や保護者の願いや現実をどれほどくみ取り、情熱をもってどれほど語れるか、その子の幸せをどれほど願っているかと問いながら、事実と実践に基づいた研究がなされればと願っています。

II 報告及び質疑討論の概要

報告1-⑨

「これからも肩貸し合ってがんばろう」 (長崎県人教)

報告者は、日常的に生徒たちと関わることで、日々の変化、成長を遂げると実感しています。

学級や学年集団を形成する過程で「教師と子どもたちのつながり」の大切さを感じ、「人をつなげ、見方を変える」人権教育の実践が大切だ、と考えるに至りました。

当初、人権学習を行うにも人権課題への理解が及ばず、もどかしい思いをしたこともありましたが、しかし、多様な子どもたちと関わる中で、あるいは人権学習を通して、自分自身の子どもたちへの無理解が、無意識に子どもたちを差別しているのではないかという考えに至ります。

「自分を語る」という取組からは、進路選択に悩む生徒に対して同級生の寄り添いが体现され、進路決定をしていったことを目の当たりにしました。自分を語るという行動が、語る自身の自己理解だけにとどまらず、周囲を動かし、つながっていく現実、報告者自身に新たな葛藤を生み出しました。報告者が自分自身を振り返り語ることができていないことに向き合うこととなりました。

自分自身についても生い立ちと現状について分析する機会を得て、「人の背景を知り、理解すること」が人権教育の基盤にある、その必然性を学びました。

・「なぜハンセン病について学習するのか」「なぜ自分を語る取り組みをするのか」その動機やねらいについて、また取り組みを通しての自身の変容について明らかにしていこうとする質疑応答がなされました。

・同和教育が大切にしてきた、家庭訪問で子どものくらしを見つめ理解していこうとすること、職員全体で部落との出会いについて自分を語ることを大切にしているという意見が出されました。

・C さんに対する「これからも肩貸しあってがんばろう」と言う発言の背景にある生徒同士の関わりやつながりについての質疑がなされました。

報告2-⑫

「建築を通して差別をなくすために」

(三重県人教)

報告者は、住宅会社に勤務し、顧客からの要望から、被差別部落にかかる物件を放棄し、別物件を紹介したことにより、加差別側に立ったと認識する経験をしました。その後、工業高校の教員となり、人権にかかる研修を重ねるうち、「差別に対する無知や無意識から、知らぬ間に加差別側に立ってしまう」ことを再認識するにいたります。

また、既定の人権学習だけでは伝え考えきれない課題があると実感した報告者は、自らの授業の中にするどい人権感覚を培うための要素を取り入れていきます。

「部落差別と建築」というテーマを掘り下げ、地域を知り、地域とともに学び、一つの表現を創成していったのです。

当初、人権課題に対する学習を進めるとき、「軽さ」を感じると指摘され、その本質を見極めようとしますが、生徒たちの行動の現実と彼らの変容が、自らの甘さ、未熟さに気づかされるきっかけとなりました。

自身の「軽さ」を明らかにし乗り越えるために、自身の生い立ちや成長過程での友人や母親とのかわり方、意識を見直し、開示せずに蓋をして逃げ出そうとしていた自分と向き合う必要があると実感するようになりました。

これから自分語りを実践する機会を得て、生徒たちとも向き合おうという強い意志を受け取りました。

・「もし自分だったらどうしただろうか」「部落差別について学習していたとして、自分の生活がかかってきたときに、どう対応するのか」と自分に重ねて問い直す質疑がなされました。

・高校生学習会への教員の関わりが難しくなっている現状や自主活動の場が少なくなっている現状が出されました。

・自分の娘が部落問題学習で石川一雄さんと出会うことで差別への怒りや願いを感じ取っていたという発言があり、部落問題を他人事ではなく自分事として考えるような学習の場を創造していくことの大切さが確認されました。

・生徒とともに「反差別行動」を考えていく過程で、自分の人権課題に気づく瞬間がある。自分にとっての部落問題は家族のことだったという報告者の振り返りがありました。

・「軽さ」「弱さ」についての論議が出され、今後も学び続けていくことの必要性が確認されました。

報告3-⑩

「家族と向き合うことで自分が変わる」

(熊本県人教)

報告者は、県の人権教育研究会で「自分自身をもっと振り返らなければならない」という思いを強く抱きました。

人権教育は他者を変化させる教育ではなく、自分自身が変わるための教育だと語られたことに共鳴します。

「差別する側の問題」「家族(親)を見つめる」「自分を語る」ことであるということに、自己の意識が大きく揺さぶられます。とくに、自分の家族を見つめる経験のなかったことが、報告者自身に「なんともいえない感覚」をもたらします。

「来民開拓団の真相に学ぶ」人権学習では、史実を学ぶとともに、自身を語るとき、家族について本音で語ることこそ自身の変容に不可欠な行動なのだ気づき、このハードルを越えなければ、目の前にいる子どもたちと向き合うことはできないと実感します。

また、貴子さんと母との家族の深いつながりに触れることで、自分の暮らしの中にこそ差別解消の道筋が見えるという実感も得ました。

ごちないまでの自分自身の母親と対話を実現するに至り、現実の本当の自分と向き合い、差別や偏見によって家族のつながりを断たなければならなかった現実を憎み、自身の次への行動について決意を表すことができたのです。

・「来民開拓団の真相に学ぶ」の学習を重ねていく中で自分の中にある差別心と向き合い、考えていくことを大切にしていることが報告者やフロアから報告されました。

・「自分を語る」ときに「なぜ自分のことを語らないといけないのか」について議論がなされました。

・「向き合えない」状況を作り出しているものは何なのか、そうさせてしまっている差別の現実が周りにあるのではないか。差別はされる側の問題ではなく、差別する側の問題であることが確認されました。

・自分を語ることで、自身が解放される。また語ることでつながっていきける、家族と部落差別のことを話せるようになった。そういう日常の中の営みが差別をなくすことにつながっていくことが確認されました。

報告4-⑬

「外国にルーツをもつ A さんとの出会い」

(新潟県同教)

報告者は、吹奏楽部の顧問として活動する中で、スリランカにルーツを持つ A さんとの出会い、関わり続けています。

報告者はAさんに出会う前は定時制高校に勤務

していました。

以前は、「見た目で差別しない」という自信がありましたが、Aさんと出会うことで、自らの差別的な視点を自覚することになりました。

ある日、Aさんは小学校のころよくいじめられていたと告白し、あれは「差別だった」と認識していることを知ります。その当時は、それ以上を語ろうとしなかったAさんでしたが、報告者は、Aさんを理解することができるように寄り添うことに決めます。

Aさんの成長と変容ともに、報告者は、Aさんのもつ課題解決の一つの過程として、Aさんに、自分の家族や幼少期の話をしていないけれど、自分を語る機会をもち、理不尽さへの憤りを伝える道を模索したいと感じています。自分をどのような自己開示ができるのか、これからの課題として向き合いたいと考えています。

Aさんと関わり語り合う中で、外国にルーツにある子どもたちと異文化理解の領域を越える、人間同士のつながりが差別を解消することができる現実に生きている自分に気づき、生徒共に行動することが不可欠だと学んでいます。

日々のかかわりとAさんの隣にいつもいる報告者の存在が人権教育の軸となることが多く語られました。

「Aさんが、この学校で変容し、もっと成長してほしいと感じることができるレポートでした」というエールがありました。

・Aさんに対する周りの見方や周りの子に対する取り組み、小中学校時代の時にこうしてほしかったという本人の願いなどについての質疑応答がなされました。

・中学から高校へ引き継ぐ連絡会のありかたについての質疑がなされました。

・いじめについて、学校は気付いていたのか、周りの友だちの反応や受け止め方について質疑が出されました。

・「ダブル」「ハーフ」「ミックス」などのカテゴリーに分けるという報告者の姿勢が一旦問われたが、本人が自分のことをどう言いたいのか、自分で決めることが大切だという思いに今は至っていることが出されました。

・人権学習を創造するときに、部落問題学習に取り組むことで他の人権課題にも重なるところがあることが確認されました。

報告5-③

「生徒の夢に寄り添っていきたい」

(大阪府人連)

Aさんとの出会い(全日制普通科からの2年を経ての編入)により、定時制課程に在籍した2年間をレポートされました。

Aさんの生育過程や経験にないにかかわり、時間をかけて対応している状況が明らかになりました。

した。

Aさんの卒業に至る報告者の関わりを見る中で、Aさんの変容に不可欠な要因をとして浮上したのは、現在の学校教育の実践環境の重要な要因であると実感できました。

学校の中では、友人関係も良好で、相互に影響を与え合っている様子がうかがえました。

キーワードとして浮上した要因は、「社会関係資本の存在と連携」「学校を中心とした多様な場の運用」「場の創成と機能化を図る」ということです。

Aさんにとって、多様で多層的な教育環境は、適時、適宜に作用するように連携網が形成されており、だれ一人として生徒を排除しない、まるごと抱える考え方の体现であると感じます。

同時に、生活の基盤にある連携網は、個々の子どもたちの状況に応じて、窓口を明確にし、に静かに深い生活環境を保障できるように留意し配慮しています。

生徒にかかわる学校体制のみならず、地域の人々の協力によって、環境保障がなされています。

報告者は、Aさんの卒業までの経緯を通して、家族ばかりではなく、家族でなくても、学校を中心に地域全体で相互扶助をもとにした観点での行動の必要性を実感し、機能している現実を見据えています。

しかしロールモデルでありながら、実態の過酷さ、しんどさを支えている現状を認識しなければならないという、学びの背景がありました。

また、Aさんは自分の立場や状況を知るにつれ、将来の自分の役割を自覚できるように変容しつつあり、ことばだけでなく、生活の姿勢で示そうとしているのではないかと感じています。

・さまざまな関係機関(NPO「居場所カフェ」、地域支援団体等)についての取り組みの具体や、学校とのつながりや連携のあり方について質疑応答がなされました。

・居場所をつくるための学校としてのしかけや、子どもへの関わり方(どういう姿勢で、どういうスタンスで)についての質疑応答がなされました。

・Aが助けを求めることができたのは、居場所にいる人の要因(思いをもった人)が大きいことが確認されました。

・厳しい状況におかれている子に、どこまでどのように自分を見つめさせていくのか、つながり続けることしか見守る術がないが、自分を語ることを通して、本人の心が解放できるまで関わり続けることが大切であることが確認されました。

Ⅲ 総括討論

＊(三重)この場での学びの中でたずねたいところ・・・幅広い地域から通う生徒たち、一人ひとりの背景を知るために、高校は何かができるのか、問いたい。人権課題の視点を持った授業の構成や活動

を現場で求めていきたい。多くの社会関係資本が、生徒にかかわることができる環境を整備していくべきだ。

…小学校や中学校でなくても、差別課題を見ることができるし、感じることはできる。地元から動いていこう。

＊(長崎)仲間づくりをめざして行動していた。学年の終わりに、自分の語りたいことを語ろうと呼びかけたことがあった。自分のことを語れない子の存在と現実気づかなかった自分、次に妹と関わるという再度の挑戦を図った。

…見えている、見えているようで、伝わらないということを強く実感している。聞く側、わたし側の課題性を再認識した。

＊(香川)若輩者だが私見を。海外協力隊から帰還したばかり。「途上国」への上から目線の自分がいた。パラオの子どもたちは人権にかかる意識は高いと感じた。子どもたちは自治と共助・相互扶助によって暮らしている。いま、6年生の担任だが、自然に介入しなければ人権意識はどうなるのか？日本は人間関係が希薄になっていないか？

…仲間づくりを基盤とする行動の必然性を感じた。
…全人教に対して、諸外国の取組を知りうる機会をつくってほしい。

＊(福岡)教員全体のなかで、同和教育に真摯にかかわる人が減ったのではないか。部落問題を知らずに、部落問題を伝えようとしているのではないかという指摘を受けた。

…自分語りの授業をする

…なぜ教員になったのか？について語る。

…解放教育に出会って、父との出会い直しを果たした。

…自分自身を見つめなおす機会となった。

＊(三重)教職員の夫婦が土地差別をした事件があった。

…この当事者がどのような教育と経験を経てきたのか、自身も揺らぎなく対応できるか、の自問を続けることが、風化させないことではないか。

…自分の人権学習の行動が、差別をなくす取組になっているのか、問い続けたい。

＊(大阪)語ることがなぜ、大切なのか。安心・安全な空間の形成と構成が必要ではないか。

…個別の人権教育に取り組み、新しいことを知る機会と欲望が沸き上がる。語ることは自分の言いにくいことを語ろうとし、それを受容しようとする環境が熟成される。

【成果】

・一過性の人権課題ではなくて、人権教育の視点をもった授業の構成を日常的に取り組んでいくこと。
・一人の生徒に対しては、より多くの人がかかわることができる環境をつくること確認できた。

・語ることがなぜ、大切なのか。語ることを積み重ねていくことが、安心・安全な空間の形成と構成につながる。

・個別の人権教育に取り組み、新しいことを知る機会と欲望が沸き上がる。語ることは自分の言いにくいことを語ろうとし、それを受容しようとする環境が熟成される。

・学ぶことの必要性、人と人とのつながりを創造していくことの大切さが確認できた。

・自分の人権学習の行動が、差別をなくす取組につながっているのかを問い続けることが大切であることが確認できた。

(課題)

・幅広い地域から通う生徒たちがいるので、一人ひとりの背景を知るために、高校では何ができるのか。人権課題の視点を持った授業の構成や活動を現場で求めていきたい。

・多くの人が生徒にかかわることができる環境を整備していくべきだ。

・見えているようで見えていない自分、「自分のことを語れなかった、語れば孤立してしまう」と思わせてしまう状況をどのように変えていくか、聞く側の責任、立ち位置、自身の課題性を再認識した。

・教員体制のなかで、同和教育に真摯にかかわる人が減ったのではないか。部落問題を知らずに、部落問題を伝えようとしているのかという指摘を受けた。

【総括 分散会メッセージ】

わたしたちの教育現場では、新自由主義的な教育の推進が横行しており、コロナ禍以降、拍車をかけて、新自由主義の考え方が顕在化し、直接的な影響を受けていると感じます。すなわち、公立学校における「公共性の解体」「教育の市場化」「ICT 化による学校制度そのものの枠組みの解体」が進行しているという現実です。

これらのことは、学校教育現場における「働き方改革の推進」「部活動の地域移行推進」「GIGA スクール構想の推進」という現象面で大きく子どもたちへの教育活動に先進的ではなく、後退的な影響を及ぼしていると思います。

学校が、現場の子どもたちを競争させ、査定され、評価され、格付けするという管理のもとにおき、勝ち負けや敗者への罰則などという手法を用いて、排除を生み、差別を再生産する装置となっているのではないかと懸念しています。

あたかも管理することが、教育システムであるかのように思い込む傾向があります。子どもたちに対しては、何らかの条件を満たせばこの席に座っていてもいい、この学習内容を理解できれば教室にいてもいい、この校則を守れば学校にいてもいいなどの条件を吊り上げ、教室に居づらくしてはいないでしょうか。

ある意味、恐怖で支配し、あおり、学力を向上させるのだということで、愚かというほかはありません。その行動様式が生み出す学校教育現場の現状は、

不登校児童・生徒の増加、自殺率の増加に現れています。

教育活動は元来、創造性を基盤とします。

創造の実現には、子どもたちが学校で、歓待され、承認され、祝福されなければなりません。

創造することを基盤とした子どもたちへの教育は、あくまでも社会責任によって遂行されるべきだと考えます。

人権・同和教育の実践が求め続けたものはそこにあると考えます。

学校教育現場において、「仲間づくりに始まり、仲間づくりに終わる」教育実践こそ、社会責任による教育の実現であり、それによる社会的共通資本の構成こそ、公的な教育活動の使命であると思います。

にもかかわらず、現在の公教育が求める視点に、被差別の課題や人権課題を負わされる子どもたち、しんどい子どもたちにとって、真のセーフティネットとなりえているのでしょうか。

昨今の「人材の育成」ではなく、やはり「人格の形成」をめざした活動にこそ、未来はあると感じます。

そのために、日常的に生徒や児童の理解、認識を深めることに努め、関わろうとする、本当のことを知ろうとするベクトルを持つことこそ尊いと信じます。

ときにそれが、上意下達に要求された行動でなかったとしてもです。

新自由主義的な考え方に基づく教育の実践は、もはやいつのまにか教育現場にあって、学校教育の根幹に根付いているかもしれません。

この現実を疑いもなく遂行すれば、一体どうなっていくのでしょうか。

人材の育成によって、為政者に都合の良い人間が生まれ、最大の人権侵害とされる人間の最も愚かな行動の遂行者として便利遣いされるばかりではないでしょうか。

歴史において、同じ過ちを繰り返してはならない。そんな単純なことでさえ、見過ごしてしまわないかと、懸念します。

ちゃんと、わたしたちは子どもたちの方を向き、寄り添い、悩み、思案し、行動しようとしているのでしょうか？

差別の解消やその行動は、子どもたちとともにあります。

先人たちは、言いました、「子どものためなら、考えるより動け、理屈は後からついてくる」と。

考え、理解しようとし、二の足を踏んでいる自分がいました。最初から理解できるはずもないのに……。ともに生き、ともに語り、ともに泣き、笑うことに、道筋が見える気がします。

わたしたちは、今日も、子どもたちと共にあり、行動することで、人間臭く、あがき、もがく教員の姿を目の当たりにしました。

「反差別」「人権教育」の生の姿勢を実感できたことでしょう。

明日につながる大いなる行動に心から感謝します。

と結びました。